2022年3月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第542号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

ブックインとっとり主催「第34回地方出版文化賞奨励賞」受賞 ―///☆

『海の上の建築革命～近代の相克が生んだ超技師（スーパーエンジニア）の未来都市〈軍艦島〉』

文・忘羊社代表　藤村 興晴

日本最古の鉄筋コンクリートアパート

「そもそも軍艦島はね、石炭を掘り尽くして閉山したわけじゃないんですよ。あの海域には、“黒いダイヤ”と呼ばれた石炭が、100年では掘り尽くせないほど眠っていた。軍艦島が世界一の人口密度を誇った理由がわかるでしょう？」

「すると軍艦島の高層建築は……」

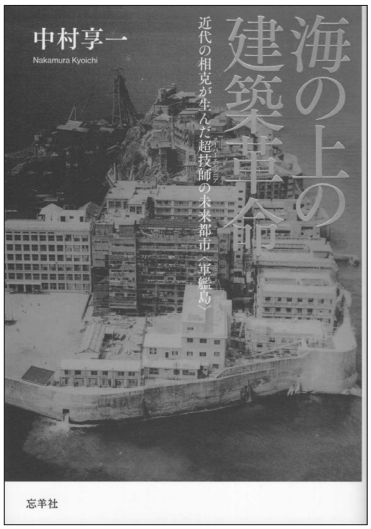
「そう。あの小さな島に高層建築が林立した理由もそこにあります。小さな島だから、上に伸ばしていくしかなかった。日本の鉄筋コンクリート造アパートは1916年（大正5）、この島に建てられたものが最初で、有名な同潤会アパートより8年も古い。労働者の住居としてつくられたものですが、とにかく見事な設計。フランスの巨匠ル・コルビュジエが、“近代建築とはかくあるべし”というテーゼを唱える10年も前に、その条件をほぼすべて満たすようなモダニズム建築が誕生しているわけです」

「こう言っては何ですが、労働者のためになぜそんな最先端の建築が？」

「軍艦島には、三菱がそれだけお金をつぎこむ価値があった。では誰がそれを設計したのか？　これがなかなかわからないんですよ」

三菱の屋台骨を支えた炭鉱の島

この度、小社刊『海の上の建築革命～近代の相克が生んだ超技師（スーパーエンジニア）の未来都市〈軍艦島〉』が第34回地方出版文化賞（ブックインとっとり主催）の奨励賞を受賞した。著者の中村享一氏は、長崎に生まれ育った建築家である。



『海の上の建築革命～近代の相克が生んだ超技師の未来都市〈軍艦島〉』中村享一著、忘羊社刊／四六判、本体価格2400円／ISBN978-4-907902-25-4

冒頭の会話は中村氏と最初に出会ったころのものだが、氏はそのとき四半世紀にわたって軍艦島のことを研究し、その後博士号を取得。一部の廃墟マニアが騒いでいる島、という程度の認識しかなかった私は、大いに蒙を啓かれる思いがしたものだった。

中村氏との出会いからしばらく経った2014年、軍艦島閉山から40周年を機に、炭鉱が操業していた時代のアーカイブ写真集（『GREAT HASHIMA』）の編集に携わらせてもらった。中村氏もこの本の編集委員を務めていたが、翌15年、軍艦島を始めとする九州・山口の産業遺構群が世界遺産に認定されると、島の知名度は一気に全国区となった。

ご存じでない方のために簡単に説明しておくと、軍艦島は長崎港から約20キロの沖合に浮かぶ小島で、正式名称を「端島（はしま）」という。全島が石炭採掘のための設備と関係者の住宅などで構成され、高層アパートがひしめきあう異様な外観から、「軍艦島」と呼ばれるようになった。

その歴史は古く、最初に石炭が発見されたのはなんと江戸時代（1810年）。明治の中ごろ三菱の二代目岩崎弥之助がこの島を獲得して本格的な採掘を開始。80年以上にわたって三菱の多角的経営を支えた。

サムライ・エンジニア

軍艦島の高層建築誕生の謎を解くため、中村氏はまず長崎の歴史風土から説き起こす。次いで日本最古の洋式炭鉱として知られる高島炭鉱のこと、そして高島や長崎造船所を手中にしてわが国最大の財閥へと成長を遂げていく草創期の三菱で活躍した技師たちの姿に迫っていく。

手前味噌だが本書の白眉はここからで、不勉強な私は知らない人名ばかりだった。多少なりとも近代史の本を読んできた自負はあったのだが、目からウロコの連続だった。

一番驚いたのは、長谷川芳之助（よしのすけ）という鉱山技師。唐津出身の士族だが血の気の多い人だったようで、怒ると刀を抜く癖があった。同郷の建築家・辰野金吾が三舎を避けたほどの俊英で、わが国初の工学博士となった。三菱入社後は各地の鉱山開発を指揮し、20代の終わりごろには三菱の幹部へと上りつめる。

“サムライ”鉱山技師、長谷川芳之助（1856～1912）

以上の経歴だけでもスゴイのだが、一番驚いたのは当時の鉱山技師が単に石炭の採掘にとどまらず、各炭鉱からの鉄道や港湾への運搬といった流通や、関係者が住まう都市計画のようなことまで指揮していたという事実。明治のインフラを築いたのは、長谷川のような“サムライ・エンジニア”たちだったのである。

大アジア主義を唱えた福岡の政治結社・玄洋社とも近い関係にあったという長谷川は常に国の行く末を憂い、「鉄は国家なり」の信念のもと、社長の岩崎弥之助に製鉄業への進出を強く勧めていたが、その資金は半ば裏切りのような形で東京・丸の内の土地買収へと回されてしまう（このとき長谷川は何と社長の弥之助を殴り倒したとの逸話が残っている。やはりコワイ人だった）。これを機に三菱と袂を分かった長谷川は退職後、八幡製鐵所創設に尽力した。

土木・造船は建築より進んでいた

本書には長谷川の他にも、鉄道から築港、ダム建設まで広範囲に活躍した白石直治や吉村長策、松田武一郎といった綺羅星のごとき“サムライ・エンジニア”がたくさん登場するが、アーティスト的な扱いを受けることの多い建築家と違って技術畑の人々はその多くが歴史に埋もれてしまっているのが現状である。

ところが当時の日本では、建築界より土木や造船といった“汗臭い”業界のほうが、技術的にもはるかに進んでいた。例えば辰野金吾は東京駅の建築に際し、鉄筋コンクリートの導入を検討したが、「あんなドロドロのものが本当に固まるのか」と不安になり断念したという。だが三菱では東京駅が出来る約10年も前に、鉄筋コンクリートの大型倉庫を完成させ、その強度や経済性を実証済みだった。歴史に埋もれた技術者たちの面目躍如だ。

中村氏には、彼らのような「忘れられた技術者（＝裏方）」の群像にスポットを当て、列伝としても楽しめるよう加筆をお願いし、２年以上をかけて推敲を重ねてもらった。

築100年を超え崩落の危機にある現在の軍艦島30号棟

キーパーソン、保岡勝也登場

さて、東京・丸の内の広大な土地を政府から買い取った三菱は、「一丁倫敦」と呼ばれたレンガ建築街を築いていく。長谷川が怒ったのは「国家にとって大切な製鉄をないがしろにして不動産とは何ごとか！」との思いだったのだが、このとき活躍したのが本書のもう一人の主人公である建築技師・保岡勝也（やすおかかつや）。

実はこの保岡こそ軍艦島の高層ビル群誕生のキーパーソンである。保岡は丸の内で初の鉄筋コンクリート建築となった「三菱12号館」を始め特筆すべき仕事を残しているのだが、残念なことに現在では大学の建築科ですら彼のことをきちんと教えていないらしい。

キーパーソンだった建築家、保岡勝也（1877～1942）

保岡は三菱に入社後、早々に渡欧して労働問題を始めとしたヨーロッパの社会情勢に触れるとともに、1800年代末から1900年代初頭にかけて勃興したモダニズム建築の洗礼を受けた。装幀家としても有名なウィリアム・モリスの「アーツ・アンド・クラフツ運動」やオーストリアの建築家ワグナーらの「セセッション運動」などに端を発し、機能や合理性を優先して装飾を廃した意匠へと変貌を遂げていく建築の潮流を、保岡はリアルタイムで目の当たりにしたのだ。

イギリスを始めとしたヨーロッパ各地で労働者向けの集合住宅が誕生したのもこのころである。保岡は単に建築の外見だけでなく、近代社会の抱える“課題”と向き合う中で築き上げられていった新たな建築思想を自家薬籠中のものとしていったのである。

台風被害と労働者確保が起因

ひるがえって日本。明治期最大の労働争議といわれる高島炭鉱事件（軍艦島は高島炭鉱の支坑の一つだった）を経験し、前近代的な雇用形態である「納屋制度」をわが国で初めて廃止した三菱だったが、坑道の浸水や炭塵爆発といった災害はその後も続き、ストライキも頻発していた。特に軍艦島周辺の海域は波も荒く、労働者の受け入れのため小さな島を埋め立てて拡張しては台風の高波によって護岸ごと崩されるという繰り返し。住居の新設も頭打ちになっていた。そこで、三菱の経営の屋台骨を支えていた軍艦島での採炭をより安定させるために考え出したのが、「高層都市化」の構想だった。

忘れてならないのは、このとき建築に求められた使命は単に高層化すれば良いという単純なものではなかったと

いう点である。過酷な労働条件で労働者が定着するためには妻帯しても暮らせるような間取りや商店などの建設が必要だったし、疫病への備えも必須だった。何より海上の孤島では建築資材の搬入にも限界があった。

“課題”と向き合った建築

そうした“課題”を解決すべく立ち上がったのが三菱の技術者たちだった。

わが国最古の鉄筋コンクリート高層アパートとして知られる軍艦島の通称「30号棟」では、採炭に使われたワイヤーロープが鉄筋の代わりに転用され、建具は解体した住宅のものが再利用された。上から見て「口」の字になった中央部は吹き抜け（中庭）となっており、採光への工夫がなされている。当時珍しかった水洗（海水）トイレや換気ダクトも設置され、防疫面での配慮も見られる。地上階は防潮対策としてピロティ化され、屋上は広場として機能した。こうした諸々の意匠や構造は、図らずもル・コルビュジエが唱えた「近代建築5原則」を10年も先駆けたものだった。

では、大正という時代に、誰がこんな高層アパート群をつくったのか？結論は本書を読んでもらえれば幸いである。

世界的な建築の潮流とシンクロ

実は本書は氏の博士論文がベースとなっているため、当初は専門的な部分も多く、読みづらいところがあった。

今から100年以上も前に洋上の孤島に出現した労働者向けの建築が、最先端の世界の潮流と絶妙にシンクロしていた事実を立証し、建築史、技術史、労働運動史など複数の視点を整理して伝えるなどというのは、私のような門外漢の分をはるかに超えていたし、最初は内容を理解するだけで苦労した。

そのため書籍化にあたっては建築に詳しい編集者仲間の意見も聞きながら、できるだけ通読しやすい体裁に整理した。それでも受賞時の選評には「読みづらい」との意見が添えられており、編集者としての至らなさを痛感している。

とはいえ、歴史ある賞の栄誉に浴し、まずは安堵したというのが正直なところ。ありがたいことに在庫はまだまだ残っている（！）。受賞をきっかけに、さらに多くの読者を獲得できるよう地道に販売に努めていきたい。

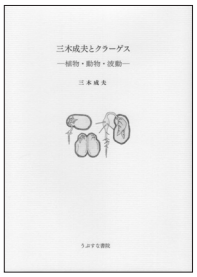
＊

ふじむら　おきはる／忘羊社（ぼうようしゃ）代表

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『三木成夫とクラーゲス －植物・動物・波動』●三木成夫ほか著



人体解剖学とは、人間のからだの構造を調べその構造のもつ意味を調べようとする学問であるが、本書に収められた論文の一つにおいて解剖学者・三木成夫は、ここから解剖学は二つの道に別れるという。一つは目的論と機械論に従って構造のもつ「しくみ」を分析する現在の自然科学の方向であり、他の一つは構造のもつ「かたち」を体得するいわば自然哲学の道である。後者において人の目は構造の形づくられたその過程に向けられる。森羅万象のどんな「かたち」もことごとく「原形とその変身」によって形成されたというゲーテ形態学の根本理論が生きてくるのはまさにここからである、三木はそう述べ、生命形態学とも名付けられた自身の比較解剖学、形態学的解剖学へのゲーテの多大なる影響をうかがわせるのである。

さて本書は1987年に没した三木の四つの論文と講演録（『宇宙の根源現象 - 宇宙と人間』、『呼吸と「いのち」』、『ゲーテ形態学と今日の人体解剖学 - 現代科学の岐路に立って』、『「原形」に関する試論 - 人体解剖学の根底をなすもの』）を収め、三木の仕事全体を見渡すとともに、代表作『リズムの本質について』で知られ、ゲーテとともに三木に多大な影響を与えたとされる、ドイツの思想家、心理学者であるルードヴィッヒ・クラーゲスの『植物心情について』『四大心情について』も収める。さらにそのクラーゲス理解を助けるフランソワーズ・ヴィアスマ・フェルシャッフェルトの『生物学者としとのクラーゲス』、そしてゲーテその人の『有機體の形成と變成』（および訳者・村岡一郎氏の解説）も掲載され、三木の理論形成をそのバックボーンの理解から見つめようという、編集者でうぶすな書院代表・塚本庸夫氏の意図が構成全体に押し出された一冊であると言っていいだろう。もとよりうぶすな書院は、三木の仕事を体系的に刊行したいという塚本氏の強い意欲によって創立された出版社であり、さらに三木を通してクラーゲスに触れたことで、その著作をも日本に本格的に紹介するというさらなる目標が加わったのだという。

ここで本書の中にもう一つ『冨永半次郎宛私信』という三木の書簡が掲載されていることにも触れなければならない。冨永半次郎という在野の求道者について知る人はそうは多くはないと思われるが、平澤伸一氏による後書き「三木成夫の中に生きている三人の思想家－冨永半次郎、ゲーテ、クラーゲス」によると、そもそも三木がこの冨永半次郎に出会ったのは、戦後航空工学部から東大医学部に転進して解剖学教室に入って間もなく、突如不眠症に悩まされたことがきっかけであった。受診した東京女子医科大学精神科の千谷七郎教授から紹介されて冨永塾に通うようになったのである。この頃の冨永は、釈尊の正覚体験を追求することに専心し、孔子、ゲーテ等の作品にその証跡を見出そうとしていたという。冨永半次郎関係の文献として柳正巳『ゲーテのフンボルト宛12月書簡で云うWendung體験とは何か』も本書に収められている。（N）

◆3400円・A5判・438頁・**うぶすな書院**・東京・202112刊・ISBN9784900470323

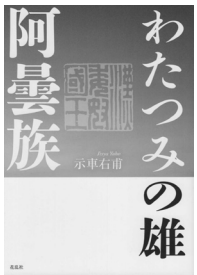
『どくヤン！　読書ヤンキー血風録』●左近洋一郎著

学費も入学試験もなく、ケンカすらお咎めなし！　ゆえに筋金入りの不良たちが集う私立毘武輪凰高校。その代わり、唯一“鉄の掟”が課せられている。それは“読書”。とにかく本を読め、それができなければ即退学というルールで、ほとんどの生徒が脱落していった結果、読書を愛するヤンキー、通称“どくヤン”が誕生した。彼らの学園生活とは一体いかなるものか？　爆笑間違いなしのヤンキービブリオギャグ漫画の完結編。もともとは講談社のネット媒体マンガ誌〈Dモーニング〉で発表され、１・２巻は単行本化、３巻は電子版のみの刊行だったが、作者と連絡を取り合っていた作家・翻訳家の北原尚彦の仲介でこうして紙版刊行の運びとなった。

実情を知らずに転校してきた一般人、野辺雷蔵の視点から“どくヤン”の生態が語られるが、登場人物のネーミングがこれまた凄い。私小説ヤンキー獅翔雪太、SF小説ヤンキー済馬音雄、時代小説ヤンキー地代康尚などなど、得意ジャンルを持ったどくヤンがひしめいている。（どのキャラもとても高校生には見えない）。さらにアンパンは本パン（本を吸う）、カツアゲはブッカツ（本を奪う）となり、ここでもギャグが炸裂。しかし彼らが本を愛する気持ちは誰よりも強い。漫画でありながらブックガイドでもある。巻末に制作秘話が満載の作者鼎談掲載、特典としてパイセンのおすすめ本紹介ペーパーが封入されている。（Y）

◆ 1000円・四六判・215頁・**本の雑誌社**・東京・202112刊・ISBN9784860114671

『わたつみの雄・阿曇族』●示車右甫著



本書は古代の豪族・阿曇（安曇）氏に着目して日本古代史を読み直す。１世紀中期ごろの日本に関する記述が『後漢書』東夷伝（後漢書倭伝）に載るが、そこに登場する奴国の王が綿積（わたつみ）氏だという。「わたつみ」とは記紀に登場する海の神であり、その子孫が九州北部の海人族・阿曇氏である。

本拠地は筑前国糟屋郡阿曇郷。国宝としても有名な金印「漢委奴国王」の読みについて著者は、通説の「かんのわ（倭）のなのこくおう」あるいは「かんのいと（伊都）こくおう」ではなく、「漢は奴国王に委ねる」と読み替えをする。金印は代々の奴国の王綿積表（おもて）・中（なか）・底（てい）、阿曇磯良（いそら）・凡海（はんかい）へと引継がれた。３世紀の邪馬台国について著者は九州説の立場をとる。所在地は筑後（もしくは肥後）の山門。邪馬台国論争については十人十色で到底私の手には負えない。４世紀末から５世紀初頭のヤマト政権期は対外史的にみると朝鮮半島に介入していく時期である。高句麗の「広開土王（好太王）碑」によって知ることが出来るが、著者は阿曇一族も高句麗との戦（４００～４０４年）に参加したとみる。大敗後、阿曇氏は衰退しヤマト王権の傘下に入ることに。時代は下り、６世紀後半の白村江の戦。中大兄の命で大将軍阿曇比羅夫は約五千人の兵とともに百済救援へと向かう。だが会戦時にはその名はない。海底の藻屑と消えたのだろうか、海人族の末路として相応しい。（Ｉ）

◆ 1500円・Ａ５判・110頁・**花乱社**・福岡・202112刊・ISBN9784910038445

『われらの仲間 ー「森は生きている」とともに』●渡辺芳子著

著者の渡辺芳子は、戦争末期、女学校を卒業後に疎開した長野県松本市で作家・辻邦生（当時は学生）と出会う。辻の影響によって女性の主体的な生き方に目覚めた著者は、一躍俳優を志し、戦後帰京して俳優座養成所（二期生）に入所。その後「劇団仲間」の創設メンバーとなって、『森は生きている』の女官長役をはじめとして数々の舞台で活躍する。

現在も毎年のように演じられて、昨年末までに2000回を超えて上演されているその『森は生きている』は、ロシアの高名な劇作家・マルシャークの児童青少年演劇の最高傑作であり、日本では湯浅芳子の訳によって1954年、俳優座劇場の柿落としで初めて演じられた。

俳優座養成所を出たばかりの著者は、その記念すべき第１回の舞台に、演出家の青山杉作に抜擢されて重要な女官長役で出演（女王役は後の仲代達矢夫人の故・宮崎恭子）。以来、中村俊一や千田是也等の名演出家の元で半世紀以上にわたってその役を務めあげ、「女官長」が代名詞にさえなるほどの当たり役になっている。

本書は、「劇団仲間」創設時の唯一の生き残りメンバーで最年長役者でもあるその著者の、舞台女優としての稀有な半生期であり、と同時にわが国の戦後の演劇界にとっても貴重な証言録となっている。「樹は根に拠って立つ／されど／根は人の眼に触れず」――若い時に「劇団仲間」に所属していた倉本聰が、一般には無名の著者に敬愛の情を込めて贈った言葉である。（和）

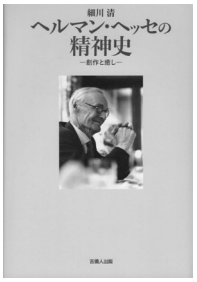
◆ 1800円・Ａ５判・157頁・**一葉社**・東京・202202刊・ISBN9784871960847

『虚子点描』●矢島渚男著

カバー写真の虚子像が魅力的だ。そして、帯文「虚子はいかにして俳人虚子になっていったのか」に目が行く。俳人虚子の形成について考察していく著者の論を興味深く読むことが出来た。高浜虚子は愛媛県松山市に明治７年に生まれた。松山にはその前年河東碧梧桐が、７年前には正岡子規が生まれている。虚子は碧梧桐と中学で同級となり、碧梧桐の兄と同級の子規を知り慕うことになる。近代俳句の礎ともなった三人が同時期に松山に存在したのである。本書はこの三者のやりとりも交え、若き虚子が子規のもとで俳句に打ち込む様子、精神的な気持の変化、葛藤、また衝動的な行動なども丹念に調べ綴ってあり、頁を括るごとに冒頭のテーマがどんどん形を現してくる。本書に出てくる虚子の約300の俳句は、明治24年虚子17歳の句「えりもとをなぐるやうなり暮の秋」から始まる。その後大正期、昭和前期、疎開した小諸時代、そして昭和後期と章立てされたなかに、その起伏に富んだ生涯と変遷する時代をたどり、それぞれの句の味わいや技について考証と解釈を重ね語ってゆく。「遠山に日の当りたる枯野かな」「去年今年貫く棒の如きもの」など多くの名句とともに、今まであまり取り上げられていない句も紹介され興を引く。そして８５歳の死の数日前に詠んだ「独り句の推敲をして遅き日を」の句で終わる。いずれも俳人である著者の独自の感性と知性で感受した、一気に読了を誘う本で、俳句界の大樹、高浜虚子の全体像がリアルに立ち上がる。（K）

◆ 2200円・四六判・253頁・**紅書房**・東京・202201刊・ISBN9784893813497

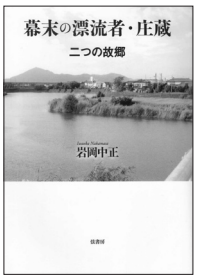
『ヘルマン・ヘッセの精神史 －創作と癒し』●細川清著



世界の文豪と称されるヘルマン・ヘッセ。ノーベル文学賞受賞者でもあり、20世紀を代表する偉大な作家と言って間違いないだろう。13歳時に発した「自分は詩人になるか、さもなくば、なににもなりたくない」という言葉を常に念頭に置き、人の心の内面に向かう探求とその統一的帰結がヘッセ文学の終生のテーマであった。しかし、家庭環境や世界情勢はこうした彼の願望をすんなりとは許してくれなかった。両親は敬虔なキリスト教徒であり、有名神学校に入学させられるが15歳で無断脱出し、神経科病院に送り込まれる。職を転々としながら、27歳でやっと文名を上げ、その後「車輪の下」を発表。一方、第一次世界大戦時にドイツの国政批判をしたところ反発を買い、精神的不安に陥る。私生活では三度結婚。最初の結婚は妻の精神病などで破綻しており、その後は安寧を得るも、決して平坦な道のりではなかった。　そんなヘッセを精神医学者である著者が精神分析的角度で追究。生い立ちや夢日記にスポットを当てた後、癒しという視点に関して「デミアン」「シッダールタ」「荒野の狼」そしてノーベル文学賞受賞作の「ガラス玉遊戯」の作品分析を試みている。自分を神経症と認め、それでも創造行為への情熱が衰えなかったヘッセは創作に癒しを求め、病の克服への支えとする。晩年には庭仕事によって、三人目の妻と共に精神を安定させたヘッセが、現代に読み継がれる理由がここにある。（Y）

◆ 2000円・四六判・294頁・**吉備人出版**・岡山・202112刊・ISBN9784860696726

『幕末の漂流者・庄蔵 －二つの故郷』●岩岡中正著



江戸時代の漂流者といえばジョン万次郎・大黒屋光太夫などの名前がよく知られていますが、当然それ以外にも多くの漂流民が存在しました。本書の主人公である庄蔵（原田庄蔵）もそのひとりです。1807年肥後国川尻の廻船業を営む家に生まれた庄蔵は、1835年川尻から天草に渡り、そこを出港したのち大風に吹かれ、遥かフィリピンのルソン島まで漂流してしまったのでした。その後紆余曲折を経てマカオまでたどり着き、1837年アメリカ船モリソン号に乗って故国への帰途に就いたのですが、幕府によって帰国は認められませんでした。その後マカオや香港で残りの人生を送ったとみられています。

それでも1841年にマカオから川尻の家族に宛てて書いた手紙が残されています。無事家族の元まで届いた手紙には、生きているのに帰ることが出来ない無念さの一方で、「漂流した日を命日と思って欲しい」など異国での生活を受け入れねばならないという割り切りも感じられます。帰国が叶わなかったあと彼は、さらに帰国が難しくなるにもかかわらず、キリスト教に入信し宣教師とともにマタイ伝の翻訳に取り組んでもいました。そこには何とかして異国で生きていこうとするたくましさを感じさせます。後には香港で裁縫屋として成功もしました。一方で彼を育んだ川尻の街の文化にも著者は注目します。残された史料は多くありませんが、失意を抱えながらも力強く異国の地で生きた庄蔵の姿が明らかにされます。（副隊長）

◆ 1500円・Ａ５判・118頁・**弦書房**・福岡・202201刊・ISBN9784863292406

『中国牛鬼蛇神録　獄中の精霊たち』●劉燕子監訳 楊曦光著

「牛鬼蛇神」とは牛の頭をもつ鬼神と蛇の姿をした神であり、奇怪で邪なことをする悪人、醜悪な容貌を意味する。このオドロドロしい書名は原題で、文化大革命期の中国で共産党権力から凄惨な弾圧を受けた著者と、同じ獄中にあった者たちの怨嗟がこめられている。1949年の革命で地位と財産を得た新興特権的階級の家に生まれた著者は、幼少時より俊英の誉れ高く、革命的英雄主義を崇拝して育つ。しかし文革が始まると、両親は反革命修正主義分子の罪状を付され、人格をも否定された母は非業の死を遂げる。高校生になった著者は、この社会矛盾は毛沢東理論では解決できないと考え、マルクスの原点に戻り、農村に入って社会調査をし、「中国は何処へ行くか？」を執筆する。だがこれにより10年間の労働改造の判決を受け、労働改造所に送られて死刑に怯えながら強制労働を強いられる。そこには、思想家、社会運動家、企業家、技術者、農民、キリスト者、医者、スリ、同性愛者など様々な人々が国家への反逆を問われて拘禁されていた。彼らと密かに議論を交わす中で、共産党に反対するのは人民のためであることの意を強くする。やがて米国に渡って経済学者となった著者は、「獄中の精霊たちの」生き方を残さねばと決意する。決して容易でない本書の読解を、巻末の小林一美「重要事項・諸問題解説　毛沢東の時代と中国世界史の中で理解するために」が助けてくれる。労働改造は近年のウィグル族への迫害に重なる。

（飯澤文夫）

◆3500円・四六判・533頁・**中国書店（集広舎）**・福岡・202112刊・ISBN9784867350218

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2022年1月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　０２　ｖｏｌ．６８６　プレスアート編　298mm × 232mm　123頁　４５０円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22512-2　22/02

◆**編集部が本気で選んだ　仙台のおいしい店　－Ｓ－ｓｔｙｌｅ　ｋａｐｐｏ　特別編集**　プレスアート編　280mm × 210mm　160頁　１８００円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22526-9　22/01

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　５０５　２０２２年1月号　廣瀬　仁編　Ａ４　191頁　２５４６円　地域環境ネット［埼玉］　978-4-909864-37-6　22/01

◆**ほほづゑ**　第１１１号　長谷川　智恵子編　Ａ５　121頁　５５６円　三好企画［千葉］　978-4-908287-42-8　22/01

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．６２０　２０２１年１２月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　104頁　３２７円　かまくら春秋社［神奈川］　978-4-7740-0843-1　21/12

◆**書２１**　Ｎｏ．７４　澤田　博史編　Ａ４　88頁　２０００円　匠出版［神奈川］　978-4-925212-83-0　21/12

◆**道**　Ｎｏ．２１１　木村　郁子編　Ａ４　74頁　１１４３円　どう出版［神奈川］　978-4-910001-19-7　22/01

◆**くらしと教育をつなぐ　Ｗｅ**　Ｎｏ．２３６　２０２２年２／３月号　中村　泰子編　吉田　真紀子編　Ａ５　80頁　８３０円　フェミックス［神奈川］　978-4-910420-10-3　22/02

◆**アーカイブズ学研究**　Ｎｏ．３５　日本アーカイブズ学会編　Ａ４　208頁　２５００円　岩田書院［東京］　978-4-503-22506-1　21/12

◆**子どもの文化**　Ｎｏ．６０６　２０２２年２月号　片岡　輝編　Ａ５　47頁　２９０円　子どもの文化研究所［東京］　978-4-503-22527-6　22/02

◆**子どもと本**　第１６８号　子ども文庫の会編　Ａ５　48頁　５９０円　子ども文庫の会［東京］　978-4-906075-73-7　22/01

◆**ｔｈｅ座**　Ｎｏ．１１１　高橋　彩子編　Ｂ５　36頁　１０００円　こまつ座［東京］　978-4-503-22511-5　21/12

◆**セセデ**　ｖｏｌ．７３１　２０２２年２月号　朝鮮青年社編　Ａ４　47頁　４８２円　朝鮮青年社［東京］　978-4-503-22514-6　22/02

◆**東京かわら版**　Ｎｏ．５８３　２０２２年２月号　佐藤　友美編　203mm × 110mm　200頁　７２７円　東京かわら版［東京］　978-4-910085-18-0　22/01

◆**こどもとしょかん**　第１７２号　張替　惠子編　Ａ５　48頁　７１０円　東京子ども図書館［東京］　978-4-503-22509-2　22/01

◆**俳句四季**　Ｎｏ．５３４　２０２２年２月号　にしい　洋子編　松尾　正光編　Ｂ５　160頁　９０９円　東京四季出版［東京］　978-4-503-22508-5　22/01

◆**みんなの図書館**　Ｎｏ．５３８　２０２２年２月号　図書館問題研究会編　Ａ５　72頁　７５０

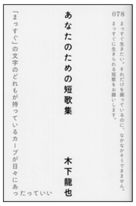
売行良好書

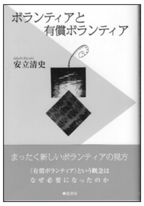
期間：2022年1月15日〜2月14日

※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『象の旅』2000円・書肆侃侃房　(3)『小学生が描いた昭和の日本』2500円・石風社　(4)『ボランティアと有償ボランティア』1800円・弦書房　(5)『特別報道写真集　大谷翔平２０２１　リアル二刀流の軌跡』1300円・岩手日報社　(6)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(7)『幸せについて』1000円・ナナロク社　(8)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『見る！聞く！歩く！高尾 浅川野鳥図鑑』900円・揺籃社　(11)『肩書のない人生』2000円・弦書房　(12)『自然農 栽培の手引き』2000円・南方新社





［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『東京かわら版　Ｎｏ．５８３　２０２２年２月号』727円・東京かわら版　(2)『本の雑誌 Ｎｏ．４６５ ２０２２年３月号』700円・本の雑誌社　(3)『音楽』1800円・ナナロク社　(4)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(5)『天才による凡人のための短歌教室』1200円・ナナロク社　(6)『甲種危険物取扱者試験　令和４年版』2636円・公論出版　(7)『東西寄席演芸家名鑑　２』2000円・東京かわら版　(8)『高尾山登山詳細図全１１２コース』900円・吉備人出版　(9)『とりとめなく庭が』1400円・ナナロク社　(10)『弔いの月の下にて』1600円・行舟文化

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

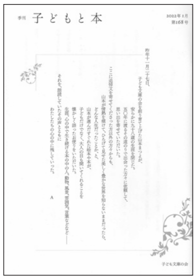
(1)『アイヌからみた北海道１５０年』1600円・北海道大学出版会　(2)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(3)『見る！聞く！歩く！高尾 浅川野鳥図鑑』900円・揺籃社　(4)『鎌倉武士と横浜』1000円・有隣堂　(5)『ジオパーク秩父　公式ガイドブック　秩父に息づく大地の記憶』1500円・さきたま出版会　(6)『終わりなきタルコフスキー』2600円・寿郎社　(7)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(8)『肩書のない人生』2000円・弦書房　(9)『地域統合の多様と複合』3600円・桂書房　(10)『北海道の縄文文化　こころと暮らし』3600円・亜璃西社　(11)『新版　富山の百山』2500円・北日本新聞社　(12)『現代語訳　上井覚兼日記２』1800円・ヒムカ出版　(13)『失われたアールヌーヴォー建築』1000円・リーブル出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼子ども文庫の会を創設し、1980年から「季刊子どもと本」を刊行し、こどもの読書の普及に５０年に渡って尽力された山本まつよさんが、昨年１１月に亡くなりました。享年98歳でした。

「季刊子どもと本」は、この１月に出た号で１６８号となっています。この号は山本さん追悼号となっています。

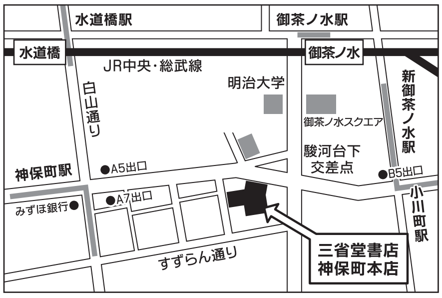


山本さんで記憶に残るのは、ヘレン・バナマン著の絵本「チビクロサンボ」が黒人差別だということで、岩波書店をはじめ絶版にした事件です。山本さんはこの動きに抗して、新たに、山本まつよ訳／阪西明子絵／戸田ツトム造本装幀で【ブラック・サンボくん】と名付けて、89年８月に刊行し、一石を投じました。私どもにも抗議の手紙などがありましたが、注文扱いで流通させました。

山本さんは、「季刊子どもと本」の創刊号で、「なぜ子どもが絵本を読むのか？子どもは何よりも、生きる力を求めて絵本を読むのです。それは、生きるために食事をするのと全く同じことです。一方は生きる心のため、もう一方は生きる体のためです。心が生きる、ということの第一は、安心できること。第二は生きていることを楽しめること。第三は困難に出会っても、それを乗り越えられると信じること。第四は人を愛することができることでしょう。…子どもの生きる努力を、誠実に支えるのがすぐれた絵本です。」と述べ、子ども文庫の会の活動に一生をささげられ、生涯を閉じられました。子ども文庫の会は、現発行人の青木祥子さんはじめスタッフの方々によって続いてまいります。（川上記）

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店　営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間 10：00 AM 〜 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。